

第三節 戦いの揺籃^{ゆりかご}

連邦暦五七三年二月一日、ヒューロザイオン宇宙要塞。

レーフラム・トゥリユー・ネレイドは、ホログラム・スクリーンに据えていた視線を、コンソールの補助スクリーンに移した。驚くほど澄み切った漆黒の瞳が酷く翳って見える。もともとさして頑健な体質ではない。“天才的参謀軍人”、“マールク元帥の好敵手”、“志向と才能を遂に整合できなかった悲劇の天才軍人”などと賞される、この年若い天才的な用兵者は、その身体深く巣くった全身衰弱症候群、通称『宇宙飛行士症候群』との戦いを常に強いられている。

あまりにも長く宇宙に出続ける宇宙飛行士……ほとんどのケースは連邦空軍の士官や、交代要員に余裕のない中小の宇宙船団の航宙士……は、しばしば原因不明の全身衰弱症状を発症する。これがいわゆる『宇宙飛行士症候群』である。徐々に徐々に全身の、特に内臓器官の機能が衰え、ある日、いきなりの発作と共に機能停止。機能不全が連鎖的に全身に波及する多臓器機能不全を併発して死に至る。

「あなたの場合とはくに心臓です」

エミル・ノーラ軍医大尉がレーフラムに与えた警告がそれだった。

「過去の発作の例から見て、最初に機能不全が起これるとしたら心臓です」

「どんな発作になるのかな？」

「過去と同じ。ただひどくなるだけ」

エミルの言葉は容赦なかった。

「いきなり心機能が劣化して、脳への血流不足が起これり、脳貧血から

失神、放置しておけば脳死に至ります。過去の発作では細々とでも心臓が動いていましたけれど、今度、大きな発作が起これば間違いなく一〇分以内に心停止。処置が間に合わなかったら、その後五分もしないうちに脳死でしょう」

だから、今後、あなたには応急措置担当の衛生兵を一人つけます——それがエミルの結論だった。

「ですが、片時もあなたから目を離すというのは無理です。今度、大きな発作……そうですね、第一次ターミア宙域会戦の後にあつたみたいなのに襲われたら、生命があつたとしても、もう完全に元の身体には戻らないと覚悟して置いて下さい」

「元の身体に戻らない、とは？」

応えるのに、エミルは一〇数秒の沈黙を間に置いた。

「聞きたいですか」

「聞いておきたい」

いづれ自分の身体に関することなのだ。知らずにいれば、発作に襲われずに済むというものではあるまい。

「覚悟だけはしっかりなさってますね」

応じるエミルの言葉には甘さががない。懸念に曇ったブルー・グリーンの眸は言葉を裏切っていたけれども。エミル自身は、まだ二〇歳にもなっていない。士官学校在学中に大統領特命で中尉に任官。連邦空軍の新戦艦『シグナ・フォース』号軍医長に任じられ、激烈な前期大戦を戦い抜いた。“ミットリツフル宙域会戦”から、ナイザルの篡奪、そして“ザ・ジャービス”の成立を経て、彼女はごく自然に“ザ・ジャービス”の幹部士官としての地位を選択している。

「二度と戦艦のブリッジには戻れない身体になるということです。心機能が極端に低下しますから、Gの急変、不眠不休での戦闘指揮、用兵のための戦術立案に必要な集中力、特に体力面ですけれど……これ

らが大幅に衰えます。無理をして戻ったら、何日もしない内に再び発作に襲われて、今度こそ一巻の終わりです」

ここ数ヶ月の体調変化を示すグラフと共に、エミルは警告したのだ。定められたスケジュールに従って十分な睡眠と食事を心がけ、軽いトレーニングを欠かさぬこと。トレーニングはあくまで決められた量だけをこなすこと。負荷の高い運動は、『宇宙飛行士症候群』^{アストロノーツ・シンドローム}を悪化させこそすれ、決して治療には役立たぬ。そして、戦艦艦上ではなく、できるだけヒューロザイオンの加重区画に身を置くこと。証明はされていないが、〇・三Gしかない戦闘艦艇の加重区画よりも、〇・六G以上の人工重力がかけられているヒューロザイオンの加重区画生活者の方が、『宇宙飛行士症候群』の発症確率が低い。また、症状の進み方も遅くなるという説もある——と。

そのエミルから、メイリアの手術日程を告げられたのは、一〇日にヒューロザイオンへ入城した直後のこと。

“ミットリッフェル宙域会戦”でのメイリアの負傷の中で最も重いのが、左胸を貫いたセラミック破片による肺の一部、肺と心臓をつなぐ血管、およびその周辺の体組織の損傷。おそらく数Gの加速で壁面に“縫いつけられた”メイリアは、内臓も深く傷つけられている。さらには左足の骨折、全身の重い打撲、重度の脳震盪がこれに加わる。「凍らせる形で出血を止めてあった左胸の外傷の完治、それと傷ついている内臓への処置、これは一部摘出を含みます」

「——摘出……？」

足下が冷えるのを、レーフラムは実感した。

明らかに青ざめるレーフラムの顔色に気づいてはいるのだろうが、エミルは無視して言葉を続けた。

「致命的なものではありません。放置しておくわけにはいきませんから」

困難なのは、だから左胸の措置だ——とエミルは指摘する。ヒューロザイオンを占領したおかげで完備した医療施設が手に入った。今なら必要な手術が行える。

「メイの体温を通常体温に戻してからもう一〇日経っています。メイの体力がそれを許す限り早く、根本的な治療を急がなければなりません」

「——つまり、メイに与える苦痛が長引く……？」

「ええ。今は薬で抑えています。薬は体力を消耗させます。それに、八ヶ月も冷凍睡眠状態では、メイの身体も相当弱っています」

最初の、そして最も困難な左胸部の手術が一五日。同時に、傷ついた内臓への措置が行われる。おそらく丸二日がかりの大手術である。

手術開始前にメイリアに会わせてもらえないか、という希望はあっさり却下された。意識が戻ったとは言え、メイリアの意識は半ばは昏睡、半ばは冬眠^{ヒュプシス・メモリア・デスオーダー}、記憶障害のもたらす薄闇の中をさまよっている。

「今、会ってもメイが私を認識できない、と言う意味かな？」

「言いにくいことですが」

それが返事だった。

そして一五日。エミルの医療チームから手術開始を告げられて、すでに丸一日が過ぎようとする深夜。レーフラムの姿はヒューロザイオンの作戦会議室にある。

それが思い切り冷酷なやり方だと言うことをレーフラムは心得ていた。

「手術中のメイを撮っておいて、連邦圏中に流すだろ？」

レイラー・ド・ナカースル。レーフラムの士官学校からの親友で、今は先任作戦参謀でもあり、おそらくはレーフラムを最もよく理解す

る立場の人間の一人。そのナカースルでさえ、レーフラムを見つめる目の中に憎悪を宿らせたほどだったから。

「彼女が傷ついたというのが完全な事実だと言うことを連邦圏に徹底させることができる。ナイザル・ネレイドやヒューレルが何と反論してきても、事実は事実だから」

「だからといって……そこまでやるか？」

「必要であれば、やらざるを得ない。違うかい、レイ。反政府軍を名乗ったところで、我々の手元にある戦闘艦艇は一〇〇〇隻を少し上回る程度。手ぶらでは艦隊は動かせないし、戦争だってできないんだ。多少はあざといやり方もやむを得ない……そうじゃないのか？」

「しかし……メイを」

「メイだからだ」

「それは分かっている……しかし……なあ」

「ミットリツフェルで、わたしはヒューレルの艦隊を捨て駒にした」

レーフラムはいきなり話題を変えた。

「用兵上、必要最小限度の兵力でミューケル艦隊を足止めしておかなければならなかった以上、ヒューレル艦隊を捨て駒にするのはやむを得なかったかも知れない」

「……」

「だけど……」

レーフラムの声は囁くように小さくなった。

「捨て駒にされたのはヒューレルだけじゃないと言うことなんだ、レイ」

“ミットリツフェル宙域会戦”の詳細なポスト・モータム：戦後の戦術分析……が行われれば、レーフラムの意図はいずれ明らかにになる。ヒューレル艦隊だけではない。彼の艦隊に従った艦隊将兵すべてが、自分たちが承知の上で死地に投げ入れられたことを悟るだろう。そして、彼ら自身には一言の了解も求められていなかったことも。そうな

れば、ナイザルの“篡奪”への怒りは、“ザ・ジャービス”、こと反政府軍への憎悪へすり替えられてしまうかも知れない。

「だから、先手先手を取っていくしかない」

「常に連中の言い分を“証文の出し遅れ”にさせておくことか。そのためにメイを使うのか？」

「そうだ」

一転して、応える口調が断ち切るように激しかった。

「それでメイにもしものがあつたら、どうするつもりなんだ、ええ、この冷血漢？」

「彼女が……もし、亡くなるようなことがあつたら……」

「盛大な葬儀を行うってか？」

殴りつけられたような表情で、レーフラムは親友の表情を凝視する。その視線が浮かべていたのは、意外さや暴言への怒りではなく、自らの考えを読み抜かれたことへの驚きだった。

「盛大な葬儀を催して、メイの“功績”を讃え、彼女の生命いのちを奪ったヒューレル一派の非道を鳴らす。何度でも何度でも、連邦圏の市民すべてが、メイを殺したのがヒューレルだ、ヒューレルは栄達のためには味方でも敵でも見境なしに殺戮してのける恐るべき存在で、彼を任用しているナイザル・ネレイドの治世もいずれ同じ道を歩むだろうと信じ込むまで宣伝を繰り返す……」

「……いけないか？」

「……いけないとは言わないさ」

それ以上、非難めいた言葉がナカースルの口から吐かれることはなかった。メイリアを案じる余りにいても立ってもいられないほどに繊細な一面と併せて持つ、レーフラムの冷酷なほどの反面を、確かにナカースルは理解していた。

二月一五日の夜。

手術完了のサインはまだ届かず、レーフラムの姿もまた作戦会議室の作戦コンソールから離れることはなかった。重い疲労が瞼を押し下げようとするのに、レーフラムは渾身の力と精神力を振り絞って耐える。恐れが、レーフラムを眠りから遠ざけた。睡魔に身を委ねてしまっている間に、致命的な知らせが届き、気がついた時にはすべてが終わっているのではないかと……と。

ほとんど無意識に、レーフラムは仮想の宇宙に銀色の軌跡を描き出していた。幾筋もの輝く光の帯が、連邦母星からターネベルク宙域を横切っていく。光の帯の目指す前、コーラル宙域から迎え撃つように光の筋が流れていく。両者が交わったとき、ヒューロザイオンから別の光の渦が流れ出て、光の帯を粉々に断ち切っていく。

太い光の奔流が、エルメティア宙域を横断して、コーラル恒星区へ押し寄せる。複数の星々から躍り出た光の群が、螺旋を描いて光の波濤を巻き込み、飲み込もうとする……いくつも、いくつも、レーフラムは仮想の宇宙の中に仮想の未来を描き出しては消し、また描き出す。「……！」

『連邦空軍艦隊損害…完全喪失もしくは大破艦艇一万三〇〇隻、損傷七七〇〇隻。人員被害戦死傷者二二万六七七〇人。』

反政府軍損害…完全喪失もしくは大破艦艇二二〇〇隻、損傷三四〇〇隻。四〇万二二二〇人。

コーラル国防軍損害―――』

我に返って、レーフラムは補助スクリーンの上を流れては消え、消えては流れる冷酷極まる数値を凝視する。嫌おうが拒否しようが、自分が戦いを指導した結果として、これらの数値は、戦術コンピュータの中のデジタル数値ではなくなり、現実の世界のものとなる。すでに数百万の死傷者を積み上げた。さらにこの上に、それを上回る数値を積み重ねて行かねばならない。

そして、今度はメイリアの姿は自分の傍らにないかも知れない。

「マイナーなトーンを奏でるのは止めろ」

ナカースルは言う。

「分かっている、分かっている……」

一人、こうして狂気の淵をのぞき込む行為。戦死者たちの声なき声に、あえて耳を傾けようとする行為。その無意味さ、無駄さを知っている。目を向けまい、耳を傾けまいと思う。

「ナイザル・ネレイドが、たとえ現在はこの分かった治世者としての姿勢を堅持しているとしても、すべての権力を一手に握った存在が、その後どうなったかは歴史に照らしてみれば明白だ」

それも分かる。

しかし……レーフラムはまだ自らを納得させることができない。なぜ、自分なのか。ル・ラント共和国からの攻撃、メルティアとの紛争、そしてナイザルの篡奪。反撃し、鎮圧し、抵抗する。なぜ、彼の手に指揮が委ねられ、何百万、何千万の死者を生み出すための命令を自ら紡ぎ出さなければならぬのだろうか。歴史に稀に現れる軍事的な天才。それが自分であることに、どうしてもレーフラムは納得できない。仮に納得できたとしても、無数の人々に対して死を命ずる権利が自らにあることを、レーフラムの感情はどうしても受けられないのだ。

感情は逃避を求め、得られぬままに狂気に満ちた旋律の中に自らを投げ入れる。

「メイ……」

呟きがこぼれたことを、レーフラムは悟っていなかった。死線を彷徨う恋人を案じる若者の悲鳴というより、苦痛を堪え忍ぶ誇り高き銀の龍の呻きともいえるべき声。

「メイ……」

レーフラムにとってあまりにも長い二月一五日の夜が、こうして更けていく。

ドウルニトウ・ラーム元帥の反ナイザル・ネレイド演説に伴って、手術を受けるメイリアの姿が全連邦圏に放映されたのは三月一〇日のことである。

「我々はその誇りに賭けてもプリンセス・メイリアの生命を失わせることを肯んじない。彼女を生死の境に突き落としたのが、連邦圏の篡奪に荷担したアリスティア・ヒューレルである以上、彼女の死は連邦における良心と理性が、最も低劣な野望に屈した証左にほかならないのだから！」

一度ではなかった。

ラーム元帥は三日を置かずに連邦圏のニュースネットワークに姿を現し、病床に伏すメイリアの映像と共に“ナイザルの篡奪”を口を極めて罵倒し続けたのである。

メルティア・スルフエイク侯爵ラルク・トヒユナも、メイリアの負傷を告げるラームの放送を、驚きとともに目にした一人だった。彼女が“ミットリツフェル宙域の会戦”の直前に発送したメイルは、ファアリアの手を経てラルクのもとに届けられた。遺書としか受け取れない内容が、ラルクにメイリアの生存の希望をほとんど失わせたのだが。

“ミットリツフェルの会戦”と、それにとまなう連邦圏の分裂は、メルティアにも動揺をもたらした。ラタウやデュレーンほどではないにしろ、メルティアにも宇宙海賊が出没し始めたが、ナイザル・ネレイドはいち早く三個の辺境警備艦隊を派遣して鎮圧に当たらせた。しかし、ヒューロザイオンをコーラルに制圧され、ターネベルク宙域の制宙権もままならない今、メルティアと連邦母星との連絡は急激に悪化しつつある。連邦空軍の把握が弱まると、まだ完全には息の根をとめられてはいない旧リアー王朝につながる勢力が、息を吹き返し始め

たのである。

「厄介なことだよ」

親友のラドス侯爵トルトゥファイ・レンは、メルティア全土で高まりつつある、“反連邦キャンペーン”に手を焼いていた。決して巨大な広がりは見せぬものの、過激なテロを繰り返すことで、確実に社会の不安を煽り立てている。

「女王を救え、連邦を打倒しろ、だとか」

女王とは、連邦の手によってゴルブ市に幽閉されている先代女王ローリア・リアーを意味する。

「市民は乗せられているのか、トルティ？」

「あんまりね。ただ、動揺している。こういうときには暴力の脅迫は意外に効くものさ。もっとも、あの女王陛下では、忠誠を尽くす気にはなかなかないだろうけどね。」

それで、マーシャは？　こういう折りだ、マーシャを取り返しておいた方がいいぞ」

連邦母星に留学させられている、ラルクの愛娘の愛称を、トルトゥファイは口にする。

「ナイザル・ネレイドがうんと言いまいね。一応、願い出てはみるが」「冷たい父親もあったものだ。こういう時は泣き落としでもなんでも、マーシャを返してもらわなきゃだぞ。幸い、メイが生きていたからいいが、あの通りのひどい怪我だ。これでマーシャにまでなにかあったらどうする？」

「わたしがファアリアのことを心配していいいなくても思っているのかね？　連邦が泣き落としの効く相手だったら、わたしは連邦大統領でも戒厳司令官の前でも膝まずいて、ファアリアを返してくれと哀願するよ。靴を嘗めろ、と言われたら、そうするかもしれない。私はファアリアも、メイも見殺しにはしたくない」

「おい……ラルク……」

「通じない相手だ、連邦は。ナイザル・ネレイドもだ。私にも自尊心はある。効果がないと一〇〇パーセント分かっている。そういう相手に膝まづけるかね？」

「分かった。その通りだろう」

ラルク・トヒユナもトルトゥフィ・レン・リアーだけでなく、この時メルティア政府を主宰していたメンバーはいずれも、政治家としての水準は標準からはるかに抜きんでたものだった。彼らは動揺する地方行政官を激励し、必要な処置をつぎつぎに施して市民の動揺を抑え、旧リアー王朝派の妄動を制圧した。

「しかし、いずれにしても短期的なものだ」

国防長官のヒルター男爵は、メルティア政府の前途を楽観視してはいなかった。三月末の閣議で、彼は指摘している。

「もともとと暴力によって成立した国家だ。連邦空軍という暴力装置のたがが外れれば、あちこちで武装勢力が蜂起を始めるだろう。ナイザル・ネレイドは、むこう数年間の内に全連邦圏を制圧し得るほどに優勢だろうか？」

「何とも言えないところですが……」

国防長官を務めるヘルムウェイ・トヒユナ伯爵である。

「『ヒューロザイオン宙域の会戦』の経緯を見ておきますと、特にレーフル・ネレイド少将の用兵には端倪すべからざるものがあります。あまり口はばつたいことはいえないのですが……」

“メルティア最高の勇将”と連邦空軍からの称賛を受けた元宇宙軍少将は、コバルト・ブルーの眸を苦笑させる。

「ナイザル・ネレイドが、レーフル・ファウルス・ネレイド……ナイザルの次男だそうですが……を信任して用兵の全権を委ね、かつレーフル・ネレイドがナイザルに全幅の忠誠を誓う……のであれば、少なくとも連邦圏の半分は二年以内にナイザルの麾下につきましよう」

「しかし、一度や二度の会戦で、レーフル・ネレイドの用兵能力をそ

こまで評価するのはどうかね。運ということもあるだろうし……」

「お言葉ですが、ヘルマート卿、軍事には天才はありますが秀才は少ないのです。そして、天才はいつ現れてくるかまったく予想ができません。我々にできるのは、戦いのあとを辿って見て、彼が天才であったことを知るのみです」

「既に、レーフル・ネレイドは天才としての軌跡を描き始めている、卿はそう主張するわけだね」

「さようです」

「了解した。それで……卿の上げた前提条件二つ。ナイザルはレーフル・ネレイドを信任するか。そして、レーフル・ネレイドは信任に無条件の忠誠で応えるか？」

「否……でしょう。少なくとも後者の条件は」

驚きを込めた複数の視線が、発言者を求めて旋回した。

「スルフエイク侯、その根拠は？」

「一つにレーフル・ファウルス・ネレイド提督ひだりなりの為人。今一つは、彼らネレイド親子に対する、連邦空軍の反発」

「レーフル・ネレイドの為人ですと」

「ええ、レーフル・ネレイドという人は、兄のレーフラム・ネレイド提督とは全く異なる為人の持ち主と考えた方が宜しい。ナイザル・ネレイドは、他者の支配に至高の価値を見いだす人物だが、レーフル・ネレイドの価値観はやや違うように思われます。彼は戦い、捷つことを求める……そうですね、歴史上、英雄と呼ばれる人物にしばしば見られるタイプと言えましよう。連邦圏を制覇するためには、ナイザル・ネレイドはレーフル・ネレイドを信任しなければならぬ。ナイザルには固有の武力はないし、それに彼自身の軍事的な才能は、彼の息子達に及ばない。しかし、戦い捷つことを最高の価値とするレーフル・ネレイド提督が、ナイザルの支配に甘んじ続けるはずはない」

「それは理解できません、侯。それで……？」

「当面は、しかし、ナイザルとレーフル・ネレイドは親密な協力関係を結ばざるを得ないでしょう。ナイザルは次男の軍事的天才が必要で、特に、現状では……」

一方、レーフルも政治力ではナイザルに及ばない。更に武勲を立て、連邦空軍に確固たる足場を固めればそうでもなくなるだろうが、いまのところはナイザルの政治力の庇護を必要とするからだ。

「しかし、連邦空軍の生え抜きの幹部たちは反発するでしょう。早い話、世襲の王朝というものを、テクノクラートは嫌うものですからね」

リアー王朝成立以後、メルティアがしだいに衰退したのも、多くのテクノクラートが世襲王朝を嫌って連邦に帰化したからだ、とラルクは歴史的な知識を披露する。

「なるほど……すると、連邦空軍の一部はいずれ、ナイザルに叛する……と？」

「その可能性が強い、と申し上げるべきでしょう。その戦いに勝てば、ナイザルとレーフルのネレイド親子は連邦圏制覇に手をかけることができる。しかし、ナイザルとレーフル・ネレイドの蜜月はいつまでも続かない……」

つまり連邦圏の内乱状態はかなり続くともみられないわけだ、とヒルターは憂鬱極まる結論を会議卓の上に放り出した。連邦圏の混乱が続けば、一種の割拠状態が生じる。弱肉強食の群雄割拠状態を生き延びられるだけの経済的、軍事的な余力は、今のメルティアにはなかった。

「それで、スルフエイク侯爵、我々のオプシオンは？」

「誰かと結ぶことです。それしかないでしょう」

ラルクは平然と言う。

「メルティアの国力と引き替えに、軍事的な庇護を得る……それしか、少なくともメルティアが生き延びる策はありません」

ナイザル・ネレイド、それともレーフル・ネレイド、または第三の勢力。

「今一つのチョイスはル・ヲントのマールク提督……」

「侯爵……それは難しい」

さすがにヒルターはかぶりを振る。

「“ローナクの虐殺”が実際に虐殺であつたかが問題なのではありません。彼らが連邦の敵であり続ける以上、彼らと手を結ぶことがメルティアを連邦の敵に仕立て上げてしまうことを意味してしまいます」

「ル・ヲントは遠く、連邦は近い……」

「左様です、侯。連邦が、その本質においてむき出しの凶暴な軍事国家であることは、侯ご自身がご指摘なさつたことです。物理的に一万隻の戦艦が押し寄せてくれば、メルティアには対抗すべき手段がない」

「ええ、わたしもル・ヲントと手を握れるとは思えません」

ラルクは、ファアリアの父親としてだけでなく、優れた政治家・歴史家としての透徹した未来への予見能力で、後世に謳われることになる。しかし、その彼にしても見通せない未来というものは確かに存在した。

「握手して最もメルティアに利があるのは、レーフル・ネレイド提督……もしくは、ナイザル・ネレイドその人でしょう」

「ヘルマート卿？」

思わず上がったかに聞こえる非難の声を、ヒルターは抑えなかった。一同を見回し、ヒルターは続ける。多田でさえ深い眉間の縦皺が一层深い。

「可能性の全てを探るべきだと、わたしは考えます。ナイザル・ネレイドは、確かに連邦を篡奪した。しかし、政治家としてのわたしは敢えて問いたい。それがどうかしたのか、と……」

「男爵！」

「いや、ヘルマート卿の言は正しい」

「しかし、侯」

「まあ、聞いていただきたい」

ラルクは言う。ナイザル・ネレイドは確かに連邦の統治機構を篡奪した。しかし、彼の施策は、現在の所までは連邦政府のそれを継承し、失政はない。むしろ、旧連邦政府下で特権を享受し、不公正な利益を得ていた一部の団体が肅清され、その施策は公正さを増していると言ええるのだ。

政治は結果責任だという。今までのところ、ナイザルには失政はなく、その意味で非難されるべき結果は出していないのだ。

「ナイザルと結ぶ可能性を、彼が連邦を篡奪したがゆえに否定するというのは避けた方がいい」

反論がある。今のナイザルは、連邦市民の好感を得るためにも公正な施政を布いているだろう。しかし、政権が安定し、確固としたものになってくれば、独裁者の常としてナイザルは態度を急変させるのではないか。

「その点を否定はしません。ただ、こうも言えます。一般市民を無意味に害しないのであれば、独裁制が民主制に劣るわけではない、とね」

「それは些か……」

ヘルムウエイがさすがに眉をひそめる。

「あなたの父上のお言葉にもある……“独裁の最終的帰結が独裁者の恣意による国家そのものの衰亡であることは、論理ではなく、歴史が事実として指し示すところである”と。ナイザルもいずれは独裁者としての本質を表す……その時に備えて、保険が必要だ」

「保険……か」

微かな同意のさわめきに、意を得たりとヘルムウエイが続ける。

「卑怯と言わば言え……と聞き直るようですが、ル・ヨント……できればマールク元帥その人、およびカルシュ・コーラルとのチャネルも閉

じてしまふべきではない」

「賛成です」

ヒルターが頷いた。

「情報は大いに越したことはない。他を圧倒できる武力に欠けるのであれば、情報でそれを補う。それが小国の外交というものでしょうかな……ありとあらゆる勢力とのチャネルを、閉じてしまふのではなく、積極的に開かなければならないと考えます」

ラルクは優れた歴史家であり、未来への視野も常人よりは長いはずだった。しかし、その彼にしてやはり全てが予見可能というわけではありえない。

翌日も予定されている閣議に備えて、友人であるトルトゥフィ・レン・リアーの邸宅を訪れていたラルクの許に、ある知らせが届けられた。

「食事の最中だぞ、ティナー。少しは時間をわきまえたらどうだ」

「御免なさい」

フアーリアより一歳年上だから、まだ一四歳に間のあるティナー・レンは、トルトゥフィの長男。そして大柄ではない。柔らかいブラウンの髪をした仔鹿のようにほっそりした感じの少年である。フアーリアと前後して連邦母星へ留学した。寄宿舎住まいを選んだフアーリアに対して、ティナーは連邦母星のメルティア大使館に滞在している。

「スルフエイク侯爵は？」

「こちらにおられる」

「大使館の方に申し入れがあつたそうです」

この回線は盗聴防止されていますね、と確認してから、ティナーは切りだした。連邦政府、というよりナイザル・ネレイドが、メルティ

ア政府に申し入れてきたというのだ。

“マーシャ……じゃなかった。マーシャネス・オブ・スルフエイクを、連邦空軍中将レーフル・ファウルス・ネレイドの正式の婚約者として迎えたい……と”

無音の落雷を耳にして、静かにナイフとフォークを動かしていたラルクの手が止まる。「確かなのか、ティナー？」

“確かです”

ナイザル・ネレイドその人ではなく、連邦外務長官であるマッシュバー・ピークが大使館を訪れて、ナイザルからの書簡を手渡ししていたというのだ。まだ一四歳だが、ティナーは情報を集めること、分析することに確実な才能を示していた。

「やれやれ、厄介な……見ろ、ラルク、ナイザルはやつぱりマーシャを狙ってきたじゃないか。マーシャと奴の次男坊を結婚させ、メルティアの支配権を手に入れようとしているんじゃないのか」

「メルティアに、それほど価値はないと思うのだがね」

「冷たい父親だ。娘が意に染まない結婚をさせられるかもしれないんだぞ。もう少し、うろたえるなり、頭にくるなりしてもいいだろうに」

「わたしが腹を立てていないでも思うのか、トルティ？」

「見えるさ……ティナー、マーシャはどうしている？」

“彼女はまだ知りません”

ティナーはちよつと照れたような表情になる。

“連絡をいれたら、ホームワークの最中だから後にしてくれて言われました”

「で、そのまま引き下がったのか？」

“盗聴されていましたから……”

「盗聴……マーシャの寄宿舎のフォーンをか？」

“一時的なものじゃないかと思えますけど……回線が繋がったら、妙な雑音が入るから変だなんて思ったんです。危ないかなって思っ

て、マーシャには何も言わないことにして、後で調べてみたら、大使館側のコネクタに仕掛けがありました”

単純な仕掛けだったけれど、と笑うティナーの表情があげけないと言っているように思えた。

“それは大変だったな”

また何かあったら連絡する……言い置いて、ティナーはフォーンを切った。

「しかし、何だ……どうもティナーの奴はマーシャが苦手と見えるな。あれでは、マーシャにはさぞかし尻に敷かれることになるだろうて……」

「トルティ……」

「あ、いや、そのなんだ……」

トルトゥフィがティナーとファアリアの結婚を望んでいることを、ラルクも心得てはいる。日増しに母のシェリア・ハームに似て、美しく成長してくるファアリアの姿は、二人に、彼女の誕生時のエピソードを思い浮かべせるに十分だった。トルトゥフィが、生まれたばかりのファアリアを目にして、彼女をティナーの許婚者にと望み、ラルクは“一〇年後生きていれば考えよう”と応えた。

そして、ファアリアは既に一一歳になるうとしている。血筋なのか、歴史には人一倍の興味を示しているということだが、最近になってラルクはファアリアに問われたことがある。

「わたしも歴史家にならなければならぬの、お父さま？」

「そんなことはない。そんな規則はない。何になりたいのだね？」

「まだ分からない。でも、歴史家じゃないと思う」

我が娘ながら、ファアリアは、ときどきラルクの理解を超えることがある。以後、ファアリアが、歴史に並んで政治と経済に対する興味と資質を明らかにしつつある。少なくともラルクにはそう思えるのだ。

代々、“学者侯爵”を称し、可能なかぎり政治から遠ざかることを念じてきたかに見えるスルフエイク侯爵家である。しかし、“第二次メルティア紛争”後、ラルクは実質的にメルティアの指導者であることを求められている。何かが変化しつつあり、その変化がファーリアにおいて更に明瞭に具現されるのではないか……ラルクはふと、そうも思ってみるのだ。

「……で？」

友人の声が、ラルクを現実の世界に引き戻した。グラスを取り、ワインを一口啜るラルクを見つめるトルトゥフィの視線は苛立たしげだった。

「繰り返して言うが、メルティアにはそんな価値はないのだよ。マーシャネス・オブ・スルフエイクと婚姻させることで、息子に支配権を与えなければならぬのだね。わたしが腹立たしいのは、無論、ファーリアやわたしの意思を無視して、一片の通告でことを運ぼうとするナイザルのやり口もだが……」

「……やり口も……だって？ ほかは何がある？」

いぶかしげなラドス侯爵の視野に、頬を僅かに紅潮させた親友の表情が映る。めったにないことだが、それがラルク・トヒユナの激怒を示す表情であることを、彼は長い友誼の結果、知識の一端に加えるに至っている。抑えた声音は、しかし、鋼鉄の針のようにトルトゥフィの聴覚に突きささった。

「これほどまでにファーリアの人格を無視してくれたことだ」

……冗談ではない。

それが最初の感想だった。

僅かな休暇を、レーフル・ネレイドは、戦艦『フェアリ・ホーク』

の私室で過ごしている。兄と僅かに異なり、彼には芸術を楽しむという一面がある。『フェアリ・ホーク』の私室には、油彩画の小品や簡単なオーディオ・システムが、質素な印象を害なわないようにさり気なく配置されている。

今、レーフルの勁烈な視線が注がれている立体写真は、室内を飾る油彩画よりも遙かに印象的だった。

「冗談ではない……」

もう一度、レーフルは今度は口に出して呟いた。

「俺を道具だと思っているのか……」

口には出さなかった。“彼女をも道具だと思っているのか、あの男は……？”

連邦暦五七三年四月一日。連邦外務省からの通達は、さしものレーフル・ファウルスも仰天させるに十分だった。

「今、なんとおっしゃったのか？」

外務長官マシュバー・ピークの言語能力に対して、その時のレーフルははつきりと疑問を露にしたものだった。

“マーシャネス・オブ・スルフエイクを貴官の婚約者として頂けるよう、メルティア政府に申し入れた、と申し上げた”

「マーシャネス・オブ・スルフエイクとは、ミス・ファーリア・トヒユナのことだと記憶している。スルフエイク侯爵ラルク・トヒユナ卿の一人娘の」

“さすがに詳しくておられるようだ。異議はないでしょうな”

「ちよつと待つてほしい。なぜ、この件に連邦政府が絡んでくる？あの男……いや、戒厳司令官閣下の意向なのか？」

“お答えする義務はないと考えるが……マーシャネス・オブ・スルフエイクは、まだ一歳だが、貴官とてまだ二〇歳に間があったはずだ”

「あと二二〇日ばかりある」

レーフル・ファウルスの口調は平板である。レーフラムなら、それ

が弟が呆然としている……めったにないことだが……ことの証左であることを見抜いただろう。

「わたしには一一の女の子を妻にするような不健全な趣味の持ちあわせはない」

「貴官も妙な男だな。わたしは契約^{婚約}を結^しべとは言ったが、何も今すぐことにおよんでしまえと言った覚えはない。それは貴官のプライバシーに属することだ」

レーフル・ファウルスの白哲の頬がかあつと赫くなる。ピークの、あまりに直接的な物言いが、彼の鋼鉄の心理的ガードを見事にぐり抜けたのだ。このあたり、ファウルスもまだ一九歳の少年でしかない。

「……」

「戒厳司令官閣下は、既に貴官が了解済みだとおっしゃっておられる。これは、貴官に了解を求めようとするものではなく、単なる通告に過ぎない」

「異議の申し立てをするな、ということですか」

「本当にまったく変わった男だな、貴官は。まだ一一歳とはいっても、あと数年もすれば、マーシャネス・オブ・スルフエイクは、連邦圏でも屈指の美女と言われるようになるだろうと、専らの評判だ。しかも、メルティアきつての名門、スルフエイク侯爵家の後継者でもある。どこに異義を申し立てるべき点があると言うのだ？」

俗物め……レーフル・ファウルスは、呟きを噛み殺した。一九歳余りで艦隊司令官・中將の地位は手に入れた。しかし、連邦空軍で数十人いる中將のうちの一人でしかない。ピークは、依然、彼の上位に位置する人間だった。

「マーシャネス・オブ・スルフエイクの意向は？」

「これは連邦からの要請だ。受けるか否かはメルティア政府の判断だ。それこそ、そんな判断を一一歳の女の子に仰ぐわけにはいくまい」

戦敗国は戦勝国の言うことを聞け、ということか……

レーフルには分かっていた。痛々しいほどに傷ついたメイリア・リーアの姿が連邦市民に与えた影響の巨大さである。前期大戦中、連邦政府はメイリアを政治的な宣伝の具として利用してきた。一度は連邦に対立し、紛争を起こしたメルティア王国の王女が、一士官として連邦空軍のために前線に立ち続けているのだ、と。

「へえ、わたしが婚約するの？」

他人ごとのような口調だった。全く動揺を示さないスカイ・ブルーの瞳の前にして、かえってティナーの方がうろたえて視線を反らす羽目に陥っている。

「レーフル・ネレイド中將？ あの大尉さんね」

初めて会ったとき、レーフル・ファウルスが大尉だったことだけは、不思議なほどの鮮明さで記憶しているのだ。その後、何度も会い、彼少将から中將に上ったことも知識として脳裏にしまい込んではいらる。しかし、なぜか彼のことを思い出すとき、それは「あの大尉さん」である。

「お父さまは何かおっしゃってた？」

「何も……でも、怒っておられるようだったよ」

「お父さまが、まさか……？」

ファーリアは納得いかなげな視線を、幼なじみの穏やかな容貌に注ぎかけた。

父が怒気を示すという光景は、ファーリアの心象から遠く離れた位置にある。

無論、父に叱られた経験は無数にあった。軍人の嫌いな彼女は、レーフラムとともに数百光年の彼方にあるメイリアの心理を理解すること

を拒む。メイリアを危険に曝し続けるレーフラムを手厳しい調子で非難するファériaを、父のラルクは穏やかだが厳しい口調でたしなめる。しかし、父が決して怒りを露にしないことも分かっていた。

「なぜ？」

“さあ……分からないな。侯爵は一言もおっしゃらなかった。腹を立てているとも言われなかった。怒っておられたからだと思う”

「変な言い方。ティナーって変よね。いつもそんな言い方なんだから」

“マーシャ……”

ファériaは、最高級の大理石の彫像のように整ったレーフルの容貌を思い返している。最近になってレーフルの兄レーフラムの立体写真を目にしたとき、彼ら兄弟を、“瓜二つとっていいくらいよく似ている”と評する他の人々の言葉に、ファériaは違和感を覚えたのだ。

レーフルをさして“連邦空軍の銀狼”と呼ぶ人々がいる。そして、レーフラムもかつては銀色の髪の狼と呼ばれていた時期があるという誤りではない。ただ、レーフラムは古代の王国の始祖を養育てたという狼の心優しさを体現する存在であり、一方他に屈することを知らぬ誇り高き猛獣がレーフル・ファウルスの属性なのではないか……

ただし、この時期のファériaは、ネレイド兄弟について、そこまです体系的に考察していたわけではない。形のいい唇を動かして紡ぎだした言葉の連なりは、彼女の内心を半分も示すものではなかった。

「あの“大尉さん”のこと、嫌いじゃないと思うわ。ハンサムだし、格好いいし」

じゃ、喜んで婚約するつもりなのか、とはティナーは問わない。傷つけられた視線で、美しい幼なじみをスクリーン越しに見つめている。微かなため息が漏れたようだった。

“どっちにしても連邦政府は、きみの意向を確認するつもりはないんだと思う。つまり、選択の余地はない……”ということなんだろうと思

うけど……”

「そんなのってないと思うな、ティナー。わたしにとっては一生の問題よ」

レーフル・ファウルスにとつては一生の問題でないかも知れない……それをファériaの韜晦ととつたのか、ティナーは注釈する。

ナイザル・ネレイドにとつて、婚姻は単に自らの勢力拡大のための手段にすぎなかった。現に、ナイザルの末娘であるエリーネ・フェアリ

は、兄たちと母親を共有していないのだ。

「不潔……」

ファériaは眉をひそめ、スクリーン越しに非難の眼差しをティナーに突き刺す。ファériaは、その意味を知ってからというもの、政略結婚という言葉が好きではない。もともと、“学者侯爵”の娘として、ファériaは同年代の少年少女たちとは比較にならないほどの歴史上の知識をもっている。好むと好まざるとにかかわらず、歴史の一面は政略結婚のリストだということも理解はしている。ただ、政略結婚を一種の“必要悪”として捉える学者的な冷徹さに、ファériaは僅かに欠けた。

ティナーは、さしてうるたえるでもなく、スカイ・ブルーの瞳の凝視に耐えた。彼は、この幼なじみの気性の激しさをよく知っていた。

“ぼくの話せることはそれだけだよ、マーシャ。後は、連邦政府がきみに直接言ってくるか、それともスルフエイク侯爵に通知が行くか……”

「知らせてくれてありがと、ティナー」

映話を切ったとき、寢室のドアをひっかくような音がした。振り返る。ドアの下に取り付けた入り口をくぐって、ふさふさした銀灰色の毛並みの猫が入ってきた。

「あ、メルシャ、お帰り」

右が金目、左が銀目。オッド・アイの猫は、ファériaを見上げて

一声啼き、お気に入りソファの上にひよいと飛び乗る。くるりと丸くなる。満足気に毛づくろいを始めた。メルシャは、ファアリアと同じ頃にこの寄宿舎に住みつくようになった。ファアリアが連邦母星へ留学して既に三年。メルシャは一歳半くらい。既に一人前の雄猫で縄張の維持と拡張に余念がない。寄宿舎の飼い猫としての地位を半ば公認されているのだが、今でもファアリアを最も親しい友人と認めているようだった。

「やだ、メルシャったら、また喧嘩してきたのね……」

片方の耳の付け根に新しい噛み傷があるのを認めて、ファアリアは顔をしかめる。

「あなたも大変よね、そうやって毎日毎日、喧嘩してくるんだもの……」

話し掛けるファアリアに、首を起こしたメルシャは不思議そうな目を向ける。応えるようにまた一声啼き、毛づくろいを再開した。メルシャの親猫は、メルシャと一緒にしばらく寄宿舎に居候していたが、その内姿を見せなくなった。友人のアヤ・フランナなどは言ったものだ。

「猫ってね、死ぬときは急にいなくなるんだって。きつと、死ぬと分かって、行っちゃったんだと思うな……」

メルシャがかなり高価な品種の猫であるらしいことを、彼女は知っている。多分、飼い主が飽きて捨ててしまったのだろう。人間なんて勝手なものだ、と思う。

「似たようなものかなあ……メルシャも、わたしも……」

そんな風にも思う。ピンと来ないのだ。ファアリアはまだ一二歳にもなっていない。連邦政府のやり方は、ペット産業のやりかたと軌を一にするものように思える。ペット産業にとって、メルシャはID番号で表されるデータベースの一データに過ぎない。連邦政府にとって、ファアリアはファアリア・トヒュナという一二歳の少女ではなく、

メルティアのスルフエイク侯爵の一人娘、“マーシャネス・オブ・スルフエイク”、政治的に利用価値の高い持ち駒の一つ……

「レーフル・ファウルス・ネレイド……連邦空軍中将閣下……ね」

何かしら背筋が冷たくなるような気がして、ファアリアは身体を震わせる。レーフル・ファウルスに対する感情だけは、この聡明な少女にしても不明の極致だった。心底から嫌悪しているわけではなかった。しかし、ファウルスのまどついている禍々しさ。炬火のような瞳を見開いた巨大な銀狼を思わせる雰囲気、何かしらファアリアの繊細さを逆撫でするので。

僅かに肩を竦め、ファアリアはライティング・デスクのコンソールに向かった。父ラルクへのメールの送信は、彼女にとって日課に近かったのだが、この夜、キーボードの上を走るファアリアの手の動きはいつになく鈍かった。

「実際に放送を行ったのがラム閣下であったということもあります。ただ、それ以上に、一般市民と兵士たちには、プリンセス・メイリアの存在が、ル・ヨントとの戦争が大義ある戦争だと信じるための根拠となっていたわけでしょう」

情報参謀として彼の幕僚に加わったジャン・エルマー・ヴィッデル大佐は、連邦圏に広がりつつある動揺を分析してみせたものである。

「……つまり、民衆というのは、本質的に王さまやお姫さまが好きなんですな。王さまやお姫さまは常に正義で、彼らを害しようとする連中は、みんな悪辣な篡奪者だ、と」

「篡奪者か、篡奪者には違いないが……」

ヴィッデルの分析を受け入れるのに、さすがに苦笑を省くことができなかった。

「つまり、あの男は、ファアリアをメイリアの立場に立たせるつもりか……そして、このぼくは兄の身代わり」

メイリアがレーフラムに恋して『シグナ・フォース』号に搭乗を希望したのだ、と連邦圏のマスコミは喧伝する。知れたものか、とレーフルは思う。事実は、連邦政府に借りを作るのが嫌ったメルティア政府が、最も立場の弱かったメイリアを人質として差し出したところだろう。

もっとも、本気になって兄を案じるメイリアの姿を、レーフル自身何度となく目している。アンフェアなものの見方と言えないこともない。

「しかし……プリンセス・メイリアは本当にあれほどの重傷を……？」

「兄が考えもなくプリンセス・メイリアに煽動の道具として使うと思うのか？ わたしも、正直言って驚いたからな。正確には彼女の容態の悪さにだ」

「つまり、プリンセス・メイリアが負傷したのは本当だと、連邦市民に思わせようとした……？」

「彼女が完全に回復してからではPR効果が薄れる。プリンセス・メイリアがああいう状態で画面に登場してこそ、ナイザルとヒューレルの非道を訴えることができる……兄はそう考えたんだろう。実際、効果はあったことになるが。彼女が重傷であればあるほど、それだけ動揺が広がるということだ……」

「しかし……」

「それ以上言うな、ハイドリヒ。恋人を犠牲にしてまで目的を達成するのは兄の気性ではない」

「ぎりぎりの時期？」

「プリンセス・メイリアが健康を完全に回復しないが、だからといって容体が悪化することが決しないと見極めがついた、ということですね」

「その彼女をあのように傷つけたのは、連邦空軍そのものなのだ、とよりによってラム閣下に宣告されたのでは、反論のしようもない。

下級兵士達は、自分たちが本当に正義を持っていたのかどうか疑いだし、一般市民は、帰還してきた兵士たちを、メイリアを殺そうとした連中の片割れとして遇する。下手をすれば、連邦の市民社会はこれだけでも崩壊しかねない」

だからファアリアというわけなのか……

父ナイザルを呼び出し、詰問することはできる。しかし、それでどうしたというのだ。ナイザルの精神を覆う鋼鉄の鎧には、彼の舌鋒では掠り傷一つ与えることはできないだろう。

そう、ナイザルは、“反政府軍”の繰り返す煽動放送のために連邦市民が動揺を来すのを恐れている。実際、すでに動揺は大きく広がっているのだ。

ナイザルは、メルティアの支配権など望んでいない。ナイザルが、ファアリアに望むのは、彼女の“マーシヤネス・オブ・スルフェイク”の名。メイリアの持つ“プリンセス・オブ・メルティア”の響きに匹敵する、連邦市民にアピールする名の響き。そのためには、ファアリアの人格もレーフルのそれも、敢えて論じるには足りないというわけなのだろう……

全く、冗談ではない……

もう一度呟き、レーフルはライティング・デスクを飾っている美しい少女の立体写真をドゥローワにしまいこんだ。そうしながら、レーフルはふと、水晶色の髪を僅かに揺らすようにして微笑っているファアリア・トヒュナの立体写真に視線を据えなおす。初めて目にしたときは、本当に水晶の人形のように愛らしい女の子だと思ったものだが。今はもう十分に美しいという形容に値する容姿を備えつつあるファアリアを、数年先の自らの配偶者とするイメージは、レーフルを

奇妙なほど動揺させる。

レーフル・ファウルスは、すでに軍事面で傑出した才質を証明したばかりか、この後政治面でも間然するところのない能力を示すことになる。しかし、その彼も動揺することには馴れていなかった。ことにファériaが相手のことになる……

「どうしたというのだ、いったい……」

数年前、自分は兄レーフラムを戦場で倒し、父ナイザルを葬り去って連邦圏の頂点に立っているはずではなかったのか。それが、彼という人間が生を享けた理由というものではなかったのか……？

しかし……

胸のうちに朔風の吹き過ぎるのを微かに感じた。兄を倒し、父を葬り去る。そして、連邦圏の、更に宇宙の頂点に立つ。それはよい。しかし、そしてどうするというのだ……？

皇帝になるのか……それもよいだろう。

ネレイド朝シエルメス帝国の初代皇帝レーフル・ファウルス。そして、その後は……？

「――！！」

レーフルは我に返った。何を馬鹿なことを考えている。レーフル・ファウルス・ネレイド、連邦空軍中將。第三艦隊司令官。まだ、連邦空軍の頂点にすら立っていない。その自分が、“その後”のこともなどを考えていてどうするのか。

プライベート・ドゥローワにロックを下ろした。当分、開くつもりはなかった。このメルティア生まれの少女が、最も見たくない未来を見通す窓を開いてみせている。そんな錯覚にレーフルは耐えられなかった。

中將に昇進したレーフル・ファウルスは、ローゼンバッハ泊地に根拠地を置いた第三艦隊の再編成と訓練に注力する毎日である。連邦圏最大の工業力を誇るタート・レイピア恒星区の造兵廠は、第一次建艦補充計画の第三期で発注された新造艦艇を続々と竣工させつつある。僅か六恒星区を制圧するのみであっても、タート・レイピア恒星区を中心とする“ナイザルの帝国”……言うところのシエルメス連邦は、この時期、連邦圏と共和国圏を割拠した諸勢力のなかで最大のものだった。

連邦空軍艦隊司令長官の座にあるアリストティア・ヒューレル大將からの圧力で、新造艦艇は優先的に第二艦隊……ヒューレルの腹心デリック・レーゲル中將の艦隊……に配備されたとしても、第三艦隊が“ヒューロザイオン会戦”後半年足らずで六〇〇〇隻の兵力を貯えるに至ったのには、何の不思議もない。

レーフルは艦隊を三分している。高速戦艦集団である第三一任務部隊をアヴドーチャ・アルドリーシャ少將に預け、火力集団の第三二任務部隊指揮官にはリン・シー・ファン少將を据える。支援部隊である第三三任務部隊は、これも少將に昇進したエドウィン・ワイルダー提督に委ねた。

この時期、レーフル・ファウルスを大喜びさせた艦の配備もあった。待望久しかった『シグナ・フォース』級戦艦を旗艦として与えられたのだ。

「さすがに『シグナ・フォース』級戦艦……大きなものだな」

白銀に輝きわたる巨鯨『フェアリ・ホーク』号を泊地のドックに迎え入れたレーフルは、子供のようにしゃいで艦内を巡察したものだった。もともと一四番艦『アクエイリアス』として建造されたこの戦艦に、彼は許可を得て『フェアリ・ホーク』号の名前を継がせた。先代の『フェアリ・ホーク』艦長ミュレイス大佐はそのまま新『フェアリ・ホーク』の艦長に転任し、『シグナ・フォース』級戦艦艦長の

名誉を与えられた。

実のところ、すでに機装完了間際にあった『ゾディアック』級戦艦一番艦『カプリコーン』、あるいはこれまでのヒューレルの乗艦である『クラークン』を与えるという打診もあったのだが、ファウルスはいずれも拒否している。艦隊指揮能力では『シグナ・フォース』級を上回る『カプリコーン』だったが、“連邦空軍で最も美しい戦艦”と呼ばれる『シグナ・フォース』級に比較して余りに武骨すぎる艦型が彼の美意識に合わなかった。

そして……

「『クラークン』は、旗艦にするには忌まわしすぎる」

主な異論は旧『フェアリ・ホーク』号の幹部搭乗員から出されたものだった。

「味方を撃つ……まして、プリンセス・メイリアにあれば酷い負傷をさせるような戦艦は、旗艦にするには忌まわしすぎる」

“縁起が悪い”という表現でこそなかったが、ミュレイス大佐に代表される意見は概ねそれに収斂した。組織化された宗教の影響はすでに数百年前に消え失せていたとはいえ、人は未だに闇におびえていた猿人の尾を意識下のどこかに澱ませている。

「戦場での生死はしばしば運で決まりますから。わざわざ運のない、忌まわしい戦艦に乗って、自分の運をしばませることもありませんまい」

ミュレイスの意見に動かされたわけではなかったかも知れない。しかし、レーフル・ファウルス自身、『クラークン』を忌避する意識は確かにあった。

結局、『クラークン』はそのまま第一艦隊旗艦としてヒューレルの麾下に留まり、ほどなくしてローゼンバッハ泊地は『シグナ・フォース』級一四番艦の巨体を迎え入れることになった。

もっとも、レーフル・ファウルスが、単に美意識だけを尊重する若者でない証拠には、必要以上に確保された司令官用のプライベート・

スペースを削らせてもいる。尉官時代とさして変わらないスペースに、好みの油彩画と写真を何点か飾らせ、簡単なオーディオのシステムを備えさせただけの司令官私室だったが、それでも兄レーフラムと比べて“贅沢だ”と非難する声は絶えなかった。無論、気にも止めなかったが。

「シエルメス連邦、マールク艦隊、“反政府軍”、コラル自治共和国」

その司令官私室。

参謀長のネーベルシュタット、リン、アルドリーシャの三人を招いたレーフルは、連邦圏と共和国圏を割拠した諸勢力を改めて数え上げている。

「それにル・ラント共和国の政府」

「大して数に入れるに値するとも思えないが……」

ネーベルシュタットの言葉を、レーフルはさして気にとめるでもなく受け流す。二〇歳にはまだ間のある若い中將の微笑は、兄レーフラムとはまったく異なる為人を示して覇気に溢れたものである。

「マールク元帥を失ったル・ラント共和国に何かできることがあるものか、見せてもらいたいものだ」

「陰謀程度のことはできるわけではありませんか？ 暗殺は卑劣な手段ではありますが、古来、権力病患者の愛用するところですよ」

「マールク元帥に警告を発したいところだ」

レーフル・ファウルスは呟く。“ヒューロザイオン宙域の会戦”は、艦隊指揮官として、ひいては戦略家としての彼に自信を与えた。兄レーフラムの出現を予想し、予想しながら出し抜かれた屈辱はあるにしても、当面の敵であるコラル国防軍を翻弄し、本来は味方であるはずのヒューレル大将の一派の勢力に深刻なダメージを与えることに成功した。

「……下らない陰謀に引っ掛かって生命を落とすな、と」

言い差し、照れた表情になるのはレーフルの若さである。

「過信かな……兄ともまともに渡り合えないひよっこが、マールク元帥と兄が手を結んだら手も足も出なくなるのではないかな？」

「レーフラム・ネレイド提督がマールク元帥と結ぶだろうとおっしゃるのですか？」

既に何度も聞かされた予測だったが、ネーベルシュタットはいまひとつ納得いかなげに反問する。レーフルは軽く頷き、コーヒーカップを口に運んだ。

「その通りだ、ハイドリヒ」

「しかし、そんなことが可能でありましょうか？過去数年間にわたり、連邦空軍と共和国宇宙軍とは全面衝突を繰り返してきました。マールク元帥とレーフラム・ネレイド提督は、双方の戦略面の最高指導者です」

「彼らが戦略の最高指導者であり、いまや政治の……というか、既存の政治の掣肘から離れている。少なくとも兄の方は。マールク元帥については不確定要素が大きすぎるが、遅かれ早かれル・ヨント政府の制御からは離れていくと見ていい」

「——離れざるを得ない、と言ったところでしょいか」

「参謀長、それは？」

「一つにマールク元帥の功績」

やや訝しげなアルドリーシャに、ネーベルシュタットは指を折ってみせる。

「二つ目にこれまでのル・ヨント共和国政府の実績」

「巨大すぎる武功をあげた軍人と、貧弱過ぎる統治能力を持った政府……ですか」

鮮やかな緋色の髪が大きく前後に動く。

「本人の好みはどうあれ、マールク元帥の選抜肢は次第に狭く細くなつて行かざるを得ませんね……行き着くところは、政府に殺される

か、政府を倒すか」

「軍事的天才の必ず直面するジレンマかも知れませんか」

ブラック・グリーンズの瞳が氷片の光を帯びて、リン少将の表情を一撫でする。穏やかそうな温顔は、言葉以上の意味を込めた様子を示してはいなかった。無論、リンが意図してその言葉を紡いだとは思っていない。レーフラムやマールクが直面した“軍事的天才の必ず直面するジレンマ”は、レーフル・ファウルス自身の前にも横たわっているかも知れないのだ。

いや、むしろ、自分はその“ジレンマ”との直面を内心で待ちかまえているのかも知れない。このあたり、まだレーフル・ファウルスも自身の思いへの分析は不分明だった。

「もし、元帥がル・ヨント共和国と政治的に袂を分かったとしたならば、彼らは手を伸ばし合うだろう。元帥は知らないが、兄は本心からル・ヨント共和国と戦っていたわけではなかったんだから……もし、ミットリッフェルでプリンセス・メイリアを負傷させたのがマールク艦隊だったとしても、兄は個人的な恨みよりも戦略的な条件を優先させる」

「プリンセス・メイリアが亡くなっていれば、どうなったことでしょうか？」

ネーベルシュタットは、レーフル・ネレイドの信任に十二分に応えられるほど有能な参謀であり、軍人であったが、この時は不意に非生産的な興味に駆られたようだった。

コンマ数秒間、不思議そうに信頼する幕僚の顔を凝視して後、レーフル・ファウルスは僅かな沈黙に陥った。

「……プリンセス・メイリアが亡くなっていれば、兄は自らを戦場に置かなければならない理由を見失うだろう……分からねものだな。兄ほどの器量の持ち主が、たった一人の女性に、己の存在意義のすべてを見いだすというのは……」

「なるほど……」

「いずれにしても、『シグナ・フォース』級戦艦も手に入った。第三艦隊の指揮能力は数倍以上も向上するだろうし、兵力そのものも充実しつつある。コーラル国防軍を完全に駆逐し、兄やマールク元帥と覇を競うのも遠いことではないだろう。連邦圏の様子はどうか？」

無論、ナイザル・ネレイドの支配する“連邦圏”のことだ、とレーフルは注釈をつける。

「一年くらいは戒厳司令官の権限で押さえつけていくことも可能だろう。しかし、シエルメス連邦は専制国家ではなかったからな」

民主共和制をとっていた国家が、再び専制国家に逆行するためには、“主権者”たる市民自身がそれを選択しなければならない。もちろん連邦の歴史には、武力クーデターによつて政府が打倒され、軍事政権が誕生した例が枚挙にいとまがないのも事実だが。レーフルは、歴史に関する、兄譲りの豊富な知識の一端を披露する。

「未熟な民主共和制ならば、武力でも叩き潰せる。しかし、連邦の政治システムは昨日今日にできあがったものではない。少なくとも五〇〇年の歴史がある」

いまのところは平穏ですが、そろそろあちこちで綻びがはじめている……とは、リン少将である。

「ヴィッデル先任参謀が収集した情報では、セリア恒星区の一部にナイザル・ネレイド戒厳司令官による独裁に反対する勢力が生まれつつありますね。どうやら、セリア恒星区政府自身がバックアップしているようです。それから、ドレストレン恒星区では、レーゲル中将に対する反感が広がりにかけているようです」

「なるほど、レーゲル……か」

“ヒューロザイオン宙域の会戦”での失敗を問われ、ドレストレン恒星区の要衝シェイデイサイド宇宙要塞に左遷された男の名を、レーフルは薄く微笑いながら呟く。

「はい。退勢の挽回を焦っているようです。ヴィッデル大佐には、情報収集の強化を命じておきました」

兄やマールクと対決する前には、まずヒューレル大将に代表される連邦空軍内部の敵を倒し切らなければならない。そして、レーゲルはヒューレルの右腕。レーゲルを左遷することで、レーフルはヒューレルの右腕を、切り落としたとは言わぬまでも不随に陥れた。

謀略を用いてでもレーゲルやヒューレルを葬ることに、レーフルは道義的にも罪悪感を抱くことはなかった。ヒューレルたちの指揮に従うかぎり、連邦空軍は無意味な死者を戦場にただ積み重ねていくだけだろう。

レーゲルはいずれ叛旗を翻す。そのことに、レーフルは一パーセントの疑いも抱いていない。レーゲルが自重し、数年をシェイデイサイド要塞とドレストレン恒星区で過ごし、勢力を十分に蓄えたとすれば、恐るべき敵対勢力となるのは自明だった。ヒューレルの力がまだ十分に上に強い現在、口実もなくレーゲルから艦隊を取り上げるだけの絶対的な権限を、ナイザル・ネレイドですら持っていないのだ。自分がレーゲルなら、あらゆる挑発を無視してドレストレン恒星区に割拠する勢力を培うのに専念する。それ以外に活路はないのだから。

しかし、どうやらレーゲルは復讐を焦っているようだった。ドレストレン恒星区政府に圧力をかけて艦艇の建造作業を急がせ、徴兵システムを強化して兵力の急速な拡張を狙う。レーゲルの圧力に抵抗する勢力を排除するために、戒厳布告の内容を最大限度にまで拡大解釈し、言論出版に対する統制を強めようとしていた。当然のように徴税を強化し、一方で州議会にまで干渉を始めている。

「レーゲルはやりすぎですな。やつは、自分で自分の足元を掘り崩している」

「やつの限界というものだ」

レーフルは指摘する。レーゲルは艦隊参謀長としては極めて優れた

軍人だった。情報を収集し、作戦を計画し、補給計画を立案し、幕僚グループを統御する。しかし、艦隊参謀長として必要な資質は、往々にして艦隊司令官に要求されるものとは異なることが多いのも事実なのだ。

おそらく、今のレーゲルにはナイザルとレーフル・ファウルスを打倒し、連邦空軍の主導権を奪回することしか念頭にないだろう。

「具体的にはいつごろ動きだすでしょうか？」

ネーベルシュタットが、若い司令官の思案の扉を叩く。束の間、閉ざした目を、レーフルは静かに見開いた。兄レーフルとそっくりな、しかし、はるかに激しい光を湛えたブラック・グリーンの瞳。

「兄が動くときだろう」

「……コーラル、ですか？」

「そう、コーラル」

「それはいつ？」

「それははっきり分かるくらいならば、我々はローゼンバッハではなく、ヒューロザイオンにすることだろうさ。しかし、いずれヒューロザイオンなど戦略的な価値を失うことになる……いや、ハイドリヒ、残念だがわたしの戦略がそうするのではない。兄とマールク元帥がそういう戦略的状况を作り上げてしまうのだ。ヒューロザイオンなど、所詮はコーラルが連邦の最大の敵だった五年前までの状況が生んだ鬼子に過ぎない」

マールクが陥落させ、続いてレーフルがあっさりと陥れてしまったことでヒューロザイオンの軍事上の評価は大きく下がっている。加えて、せっかく要塞を手に入れたコーラル国防軍が逆にヒューロザイオンに足を掴まれ、戦略上の柔軟性を喪うに至っている事実。

「あの要塞が、要塞として機能するには数個の制式艦隊を同時に運用できるだけの経済的・軍事的な余力を持つことが条件になる」

今の連邦、コーラル、あるいは現在、要塞を占拠している反政府軍

にしたところで、そのような余力はない。

「ヒューロザイオンはつまりジョーカー？」

「その通り。あのカードがジョーカーだということに気づかない連中が、常に割を喰うことになる。」

それで計画は進んでいるのか？

概ね順調です。ネーベルシュタットは応える。

ヒューロザイオンが反政府軍に抑えられているという前提での作戦検討命令が、戒厳司令官の名前で出されたのが一ヶ月前。作戦目的は“ヒューロザイオン会戦”で深手を負ったコーラル国防軍に恢復の機会を与えないためと、ヒューロザイオンを占拠した反政府軍の動きを牽制するためであるとされている。

「いかに軍事的価値に疑問があったとしても、問題はヒューロザイオン要塞とそこに割拠状態になっている反政府軍の艦隊兵力です」

ネーベルシュタットは指摘する。

“ザ・ジャーパービス”こと、反政府軍の艦艇兵力は『シグナ・フォース』級二隻を擁する約一〇〇〇隻から一五〇〇隻。一個あたり六〇〇〇を上回る連邦空軍制式艦隊にとってはさして恐ろしい相手ではない。「しかし、補給部隊にとつては一〇隻の駆逐艦ですら大変な脅威です」連邦空軍艦隊を通り過ぎさせてから、その補給路を叩く。あるいはローゼンバッハやワラスと言った艦隊根拠地を奇襲攻撃する。または有人惑星近くに出没して、商用航路への脅威を与える。様々なオプションが可能だった。

「作戦の主目標として、コーラル艦隊への戦力的ダメージ。“ザ・ジャーパービス”の艦隊兵力の撃破は副次以下の優先順位」

レーフル・ファウルスの指示に、彼の幕僚たちはさして驚かない。レーフル自身に言わせれば、“現状戦力では無謀に近い”用兵案を提示され、ネーベルシュタットたちは作戦計画に取り組んでいる。

「今回は艦隊の機動力に頼り得る部分が少なすぎます。それだけに手

は抜けません」

「無理もできないな。多正面作戦と紙一重の作戦だ。これでしくじれば、策士、策に溺れる典型として後世のいい微笑いものだ」

その言葉は、レーフル・ネレイドが極めて優れた戦略家であることを示している。前回の作戦でも、レーフルの艦隊は約三〇〇〇光年を奔走している。“ヒューロザイオン宙域の会戦”が実のところかなり危うい賭けであったことをレーフル・ファウルスは十分に心得ている。

「今回は距離は短い、気が散る要素が多すぎる」

スポーツなら間一髪勝利もいだろうが、戦争で一か八かを繰り返していたのではいつか破綻する。そのことも十分に知っているレーフルだったが、今回にかぎり無理を繰り返さなければならぬ。まだ、彼の直接動かせる艦隊兵力は六〇〇〇前後。第四艦隊司令官のフェリー・ペイク、第五艦隊を指揮するコーウィン・ペルヴィッツはレーフルを支持しているが、第五艦隊はまだ編成途中。レーフルも、ペイクから見ればまだ同格の艦隊司令官であり、先任指揮官である。レーグルの第二艦隊や、ヒューレルの直率する第一艦隊はレーフル・ファウルスの指揮を受け入れるわけがない。

結局、今、連邦空軍でまともな艦隊と呼べるのはわずかに二個艦隊半。数にしても二万には届かないだろう。

「我々がコーラルを目指すと同時にレーグルが動きを起こし、コーラル、反政府軍がこれに呼応するように動いたりしたら、我々に勝ち目はありません」

「頼りないことを言わないで頂きたいですね、ネーベルシュタット少将」

リンは、見事に生え際の後退した頭をわずかに揺らせて、恐ろしい会話を平然と交わし合っている司令官と参謀長を交互にみやった。

「兵たちが動揺します」

「兵たちに伝えてくれ、シー・ファン」

昂然とした表情で、レーフルは言い切る。

「諸君は勝つだろう。勝って、家族のもとに帰還できるだろうと。わたしが指揮をとっているかぎり、第三艦隊に敗北の文字はないのだから。」

心配する必要はない、シー・ファン。兄は今回は干渉してこない。干渉しても意味がないからだ。コーラルとレーグルが連携することもあり得ない。むしろ、レーグルに、コーラルが偶然にも連携作戦をとってくれた、と思わせることができれば、流血はより少なくなる」

レーフルは微笑む。メイリアが目には思ったことだろう。優しさに満ちたレーフルの微笑となんと異なっていることか、と。獲物を前にした銀色の狼が、もし微笑むことがあるとすれば、まさにこんな風に微笑うのだろう……

「——それで殺戮提督の方は？」

「ターミア宙域、ミットリツフェル、グラン・ハイにヒューロザイオン……」

覇気に溢れた野心家と言うよりも、この時のファウルスの表情は悪童のそれに近い。

「四度もコケにされたんだ。そろそろ、やつも学習能力を持っていると言うことを示して見せるべき頃合いだ」

長年の腹心だったレーグルがシェイディサイドへ移った後、ペイク艦隊の情報先任参謀だったフラー・ノースウッドが大佐の階級を得てヒューレルの参謀長に就いている。

「参謀士官としては水準以上の人物です」

それがネーベルシュタットの評価だった。

「もし、殺戮提督がノースウッド大佐の助言を謙虚に容れるだけの度量を示せば、今度は軽視しがたい動きを示すことになるでしょう」

「——惜しいな」

上官の反応に、ネーベルシュタットはちょっと意表を突かれる。

「惜しい？」

「それだけの人材をむざむざヒューレルに取られてしまうのは、惜しすぎる。なんとか……」

「――!?」

電子音が、レーフル宛ての個人通話の着信を告げる。コンソールを弾いたレーフルは、ちよつとうろたえたように眉を跳ね上げた。

「何か？」

「何でもない。純粹に個人的な用件だ……」

言いかけ、言い訳じみた口調に反発したように眉をつり上げて見せる。

「悪いが、しばらく外してくれないか？ わざわざ来てもらっておいて、勝手な言い草だとは思うが」

敬礼し、ネーベルシュタットはリンとアルドリーシャを促して司令官私室を退出する。艦内時間は夜。ローゼンバツハ泊地に繋留中の『フェアリ・ホーク』号の艦内を行き来する将兵の姿は少ない。それでも希にすれ違う兵士たちの敬礼に答礼したアルドリーシャが、ネーベルシュタットを振り返った。

「あのコールは何です、参謀長？」

「レーフル・ネレイド提督が我々の知らない腹心を動かして、情報攪乱工作をしかけている」

「参謀長!?」

「……ということではないだろう」

頑丈な長身のネーベルシュタットはにっと笑う。

「アルドリーシャ少将、貴官はネレイド提督が、我々に隠して裏で策動するような人物だと思うか？」

「そうでないことを望みます。これまで上官には恵まれなかったし、そのおかげで何度も死にそうな目に遭ってきた。ようやく経緯を向け

るに値する上官に巡り合えたと思いたいし、その上官が最も信頼しているのがわたしたちだと信じたい。もし、私的な腹心を動かして策謀するような人物だとすれば、残念ながら小官は、指揮官を誤ったと思うべきだと考えます。いかがです、リン少将？」

「同感」

「わたしも同感だ。そして、わたしが思うに、レーフル・ネレイドという人は本質的に腹心などという存在を嫌う人だと思っている」

「……では？」

「あれは、ガール・フレンドからのプライベート・コールだ」

ふざけているのとも事実を告げているのともとれる口調で、ネーベルシュタットは言い切る。アルドリーシャとリンは、呆れ返った視線を見交わした。

「真面目に言っているのですかな、ネーベルシュタット少将？」

疑わしげな口調に、ネーベルシュタットはこともなげに応える。

「なに、直感だとも」

何か言い返しかけ、リンはある事実思い当たったようだった。

「マーシャネス・オブ・スルフェイク？」

「そんなところだろうな……レーフラム・ネレイド提督の傍らにはプリンセス・メイリアという名花が控えている。我々が司令官にもふさわしい存在があつてもいいではないか……」

「プリンセス・メイリアも、確かスルフェイク侯爵の一族と聞きましたか……」

「一般には縁とか呼ばれるものだと思うか？」

「いや……」

静かな口調でリンはかぶりを振った。

「単なる偶然ですとも」

ネーベルシュタットも逞しい顎を僅かに引いた。

「わたしも同意見だ」

ネーベルシュタットはまったく当てずっぽうに言ったのかもしれないが、その言葉は意外に真実に近いところを指している。レーフル・ファウルスがスクリーン越しに対面していたのはマーシャネス・オブ・スルフェイクその人、すなわちファーリア・トヒユナである。

ファーリアが、連邦母星への“留学”と言う形で故郷のメルティアを離れたのは連邦暦五七二年の初め。彼女が連邦母星で過ごした時間はすでに丸二年余りに達する。この間、ファーリアは一度もメルティアへ帰っていない。間もなくの夏期休暇に合わせて、ファーリアはメルティアへの帰郷を連邦政府に申し入れていた。

ナイザル・ネレイドの名でなされた、ファーリアをレーフルの婚約者という申し入れに対して、メルティア政府は巧みに言を左右して回答を避けている。その報復のつもりかもしれないが、ナイザルは、ファーリアが夏期休暇にメルティアに帰ることを禁止した。明確に禁止の言葉は使われなかったとしても、許可を与えなかったのだから意図するところは同じだった。

ファーリアは怒った。

「連邦憲法典は、連邦市民は自らの意思で移動する権利を保証しています。わたし一人、例外扱いされるなんて絶対に、絶対に我慢できない！」

彼女の抗議に対して、連邦政府はナイザル・ネレイド戒厳司令官の名前で応答し、メルティア大使館経由の抗議を突っぱねている。

「戒厳布告下では憲法典の効力は一時的に停止されることもあり得るし、停止する理由に対して説明の義務は課せられない」

ファーリアは『フェアリ・ホーク』号のレーフル・ファウルスに直接抗議を申し込んだのだ。

「……悪いが、わたしにそういう権限はない」

“そういう言い方って嫌い。どこへ行っても、わたしにはそんな権限がない……の繰り返しだもの”

ファーリアが本当に怒っているのかどうか、実際のところレーフル・ファウルスにはよく分からない。碧い目が、いつもよりきつく鋭くなっている印象はあるのだが、一〇〇〇光年を超える遠距離通信のためか、表情が今一つよく読み取れない。なんとなく、この水晶色の髪の少女が、現在の状況を楽しんでいるような、妙な違和感からレーフルは自由になれないのだ。“いくら戒厳司令官だからって、一一の女の子に、いきなりだれその婚約者になれ、ならなかったらお家にかえさないぞ、なんて凄むのってひどいと思う。ひどいって言うより、まるで誘拐犯人じゃない?”

「誘拐犯人には違いないな……」

不意に笑いの発作に襲われかけ、彼は危うく無表情を保つのに成功する。ファーリアを相手にするとき、感情を読み取られないようにするのは至難の技である。

「きみは誘拐されたのだよ。というより、“第二次メルティア紛争”に敗れたメルティアは、きみという人質をさしだして、辛うじて命脈を保った。人質には人権はないものだ……歴史の授業では学ばなかったかな?”

“じゃあ、わたしと本気で結婚する気なの?”

意表を衝かれた表情で、ファウルスはスクリーンに見入った。微笑っているかと思ったファーリアは、しかし、厳しい表情をまったく弛めていない。

「……いや、それは……」

“それともしょう……ええと、将来を考えて政略結婚のつもりなの?”

「……」

“そういうのって不思議過ぎる。理解できない。レーフル・ファウルス・ネレイド提督……ナイザル・ネレイド、ええと戒厳司令官閣下だっ

たっけ？その閣下が、わたしと結婚しろって命令したら、はいはいって従うなんて、何か変。それでいて、それはわたしの権限外だって”

「言ってくれるね」

頬にかつと血の気を差し昇らせたファウルスを、ファアリアは少し表情を弛めて眺めているようだった。

「メルティアは“ターミア腕”よりの宙域に属している。今の時期は危険だ。航路の安全を保証できないな。それくらいは、侯爵も認めてくださるだろう」

“認めるのはお父さまじゃない、わたしだもの。別に一個艦隊で護衛してくださいなんて頼んでないし、それにそんなVIPじゃないつもりだけどなあ”

「本人の認識は、この際余り問題じゃない、マーシャ……いや、ファアリア」

うっかりファアリアの通称を呼んでいることに気づいたレーフルは、頬に上った血の量を増やして慌てて言い換える。

“あ、マーシャの方がいいな。いつもそう呼ばれてるから”

「そういう話をしているつもりはないのだが？」

“わたしも、そんなつもりじゃないつもり”

思わず顔を見合わせる。碧い水晶の眼差しが、どこかしら禍々しい金色の彩りを帯びたブラック・グリーンの視線を受け止める。表情にいささかのたじろぎも恐れもなかった。

「つまり言いたいのは、メルティアへきみを送り返す際の護衛を保証できないし、メルティアそのものの安全だって保証できないということだ」

“どうして？”

当面、ターミア腕は、反政府軍の勢力下に入るだろう……という自らの戦略的予想を口にしかけて、レーフルは辛うじて思い止まる。冗談ではなかった。ナイザル・ネレイドの政府は、メルティアを依然と

して自らの勢力圏内にカウントしているのだ。

しかし、レーフルは予測する。様々な理由により、しばらくは現状の連邦圏を制圧するだけでも手一杯になる。必然的にターミア腕はコーラルとレーフラム、そしてマールクの三者が割拠することになるだろう。無論、レーフルは、彼らにそれほどの行動の自由を与えるつもりはなかったのだが、いずれ、レーフル・ファウルスは“ユロノス腕”宙域すべてを制圧し、コーラル恒星区を自らの支配下に置くつもりでいる。

「そこまで約一年」

とは、他人にとっては豪語かも知れないが、ファウルス自身としては事実を述べたに過ぎないと思っている。

だが、言い換えれば、コーラルを制して“ザ・ジャービス”こと反政府軍や、マールク艦隊と正面から戦えるまでになるには約一年かかるということになる。その間、メルティアは連邦の勢力圏からは放置される格好になるだろう。

レーフル・ファウルスにも苦手があるとすれば、それはスクリーンごしに彼を凝視している水晶色の髪の少女だった。有り体に言えば、恐ろしかったのだ。今の時期に彼女をメルティアに還すのは、誇り高い美しい鷹を空に解き放つのと同じ行為なのではないか……：彼以外の誰が聞いたとしても、妄想に過ぎない恐れでしかなかったのだろうけれど。また、彼自身、ファアリアに対して微かに抱いている畏怖に似た感情を意識してはいなかった。

「……どうして、と問われても困る。ことは軍事的な機密だ」

“知ってる、ネレイド提督？軍事機密って二種類あるって？”

「なに？」

“一つは物凄く高度な技術だとか戦略だから公開できない場合。もうひとつは……”

「……」

“あんまり恥ずかしくて公表できないことも機密になるんだって。大体、軍事機密の半分以上は恥ずかしくて公表できないから、機密にされちゃった事実だって……”

「……それは、スルフエイク侯爵の言葉か？」

“ううん”

ファーリアは勢いよく首を振る。お気に入りの白いベルベットで纏められたポニー・テールが左右に銀色の軌跡を描いた。

“ちよつと歴史をかじったら、すぐにでもわかることよ”

「つまり、公表できないから軍事機密だと言い逃れをしている、そういういわけなのか？」

レーフルの言葉に怒りの内圧の高まりを感じたのか、ファーリアはちよつと驚いたように目を丸くする。

“怒ったの？”

「……」

苦笑する。一年、あるいは二年間、この少女をメルティアに還しておいて、それでどうなるというのだ？二年経ったとしても、ファーリアはまだ一三歳。一三歳の少女が、レーフルにとってどう脅威になるというのか？

「分かった。護衛に関しては問題がないことを、戒厳司令官には通告しておこう。しかし、それ以上のことを進言するのは断る。ことは政治にかかわることだからな。わたしは、まだ、政治には余りかわりたくない」

“ありがとう、ネレイド提督……わがままを申し上げて、申し訳ありません”

一転して丁寧な口調に戻ったファーリアに、レーフル・ファウルスは一瞬咄然とし、それからコールを打ち切ることを合図した。結局、この少女にいいように振り回されただけという印象を拭えなかった。

ファウルスは軽く肩を竦め、冷え切ったコーヒーを咽喉に流し込む。

いつも、何かしら翻弄されたような印象が残るにしても、ファーリアとの会話が後味の悪い記憶を残したことはなかったのだ。